

# モーリス・バレスのナショナリズムの両義性

## Ambiguity of Maurice Barrès's Nationalism

福留 邦浩\*

Kunihiro Fukudome\*

### Abstract

This paper examines the theory of French nationalism. According to Hans Kohn, there are two types of nationalism: civic nationalism and ethnic nationalism. As a theory of first category, it's "Qu'est-ce qu'une nation?" of Ernest Renan, a theory of second, it's "Reden an die Deutsche Nation" of Fichte. It is said that France is one of the typical civic nation. However, at the end of 19<sup>th</sup> century, it is often said that France had an original nationalist of second category: Maurice Barrès. In this paper, Barrès can't necessarily be categorized as an ethnic nationalist. He has some ambiguous sides.

**Key words:** French nationalism, Ernest Renan, Maurice Barrès, the earth and the dead

## 1. 問題の所在

ナショナリズムの類型化のパターンとしてよく知られたものに、いわゆる「市民的（シヴィック）・ナショナリズム」と「エスニック・ナショナリズム」の二分法がある。ナショナリズムの二分法については、ハンス・コーン以来、その批判的考察も含めて、ナショナリズムについて議論するための基本的な認識として、今日、広く受け入れられているとあってよいだろう [SMITH (2010): 42-46, SHULMAN (2002)、深澤 (2008)]。

「市民的（シヴィック）・ナショナリズム」とは、コーンの言う「西欧型ナショナリズム」にあたり、そこで形成されるのが「市民的ネーション」である。その特徴を深澤氏は「血統ないし祖先を問わず共通の領域に居住する自由な諸個人が、平等な立場で政治に参加し政治的決定を行う権利と同時にそれを果たす義務をもち、それを遂行するための制度と領域的祖国への忠誠心によって結合した政治的共同体」のことだと述べている [深澤 (2008): 8-9]。その代表例として、コーンはイングランド、アメリカ、フランス、オランダ、スイスの五カ国をあげている [原 (2011): 84-85、深澤 (2008): 5]。

アメリカ独立革命、そしてその影響を受けたフランス革命により、個人の「自由」や「平等」という「普遍的イデオロギー」に共鳴する人々が、議会制民主主義という制度を中心に政治的共同体を作った。フランス革命以後に出現した「フランス」という国家は、王政や帝政といった紆余曲折はあったにせよ、そのような国家であった。そのことを端的に示しているのが、エルネスト・ルナンの「日々の人民投票 un plébiscite de tous les jours」という言葉であろう [RENAN-鵜飼 (1997): 62]。

一方において、コーンは「東欧」やアジアに誕生したネーション——たとえば、ドイツやロシア、

---

\*日本経済大学経済学部商学科

日本——は、「市民型（シヴィック）・ナショナリズム」とは別のものと見た。なぜならば、「市民型（シヴィック）・ナショナリズム」は、前述のように、民主主義の普遍的イデオロギーに基づいて形成されたのに対し、19世紀の国民国家形成当時、そのようなイデオロギーがまだ定着していない「東欧」や東アジアは、別のものを核としてネーションを形成したと考えられるからである。では、何を核にしてネーション形成を図ったのか。それは、西欧型ネーションが克服しようとした伝統的な地縁、血縁に基いた共同体であった [原 (2011) : 85-86]。ドイツでは、この共同体は「フォルク Volk」と言われた。

ドイツ・ナショナリズムの核となる「フォルク」とは、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーらによって唱導された概念で、「古から続く伝統と神話によって美化され神話化された共同体＝民族」のことであり、「…すべての個人は有機的民族の一員であることにより存在価値が確認されるので…」、個人よりも共同体が重視された [深澤 (2008) : 6]。そのようなネーション形成を志向する運動を「エスニック・ナショナリズム」と呼び、そのナショナリズムで形成されるネーションが「エスニック・ネーション」である。その特徴を深澤氏は次のように説明している。すなわち、「…共通の血族ないし祖先と共通の起源となる祖国という神話をもち、それを現在に息づく言語・宗教・習慣といった文化的特徴、および場合によっては肉体的特徴によって確認し、それを根拠に政治的に自立している、ないし自立をめざす共同体である…」と [ibid. : 9]。

コーンは、この二つのナショナリズムについて、「市民的（シヴィック）・ナショナリズム」は西欧に、「エスニック・ナショナリズム」は東欧（特にドイツ）で発達したと説明したが、この二分法への批判として、「西欧型」にもエスニックな要素が含まれ、「東欧型」にも個人の意思を尊重するシヴィックな要素が含まれていることが指摘されている [ibid. : 10-11]。

A・D・スミスは、フランスのネーション形成におけるエスニックな性格として、前述のルナンを引き合いに出しながら次のように述べている<sup>(1)</sup>。

「…参加への意欲、すなわちルナンのいう『毎日の国民投票（ママ）』に加わる意欲は、土地への愛着と共同体への帰属、つまり両親が（またおそらく祖父母や祖先たちさえも）そうであったように、彼らの間でしか見られない兄弟愛の感情を基礎としているという想定が、発展してきた。…イデオロギーが同じかどうかにもとづいて市民権を与えるという…フランス革命の初発の一時的感情は…居住期間やエスニックな祖先にもとづく歴史的な、血統的でさえある共同体の感覚の発展に道をゆずった… [SMITH-巢山 (1999) : 160-161]」と。

19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した小説家、政治家モーリス・バレスは、「日々の人民投票」＝「市民的（シヴィック）・ナショナリズム」の側面が注目されるルナンを批判する形で文壇デビューした。バレスは「土地と死者」の理論により、フランス・ナショナリズムの唱道者として知られるが、バレスのナショナリズムは、フランスにおける「エスニック・ナショナリズム」として位置づけられるのであろうか。

この問題に関して、谷川稔氏と渡辺和行氏編の『近代フランスの歴史』の第5章で、執筆担当の長井伸仁氏もまた、ルナンを引き合いに出しながら次のように述べている。「…多様性の強い社会から単一の国民国家を生み出すには、そのネーション観念が文化的・民族的要素に縛られるものであって

はならないはずである。第三共和政は、この点で適切なネイション観念を用意していた。それを端的に表すとされるのが、エルネスト・ルナンがパリ大学でおこなった講演『国民とは何か』（1882）である。…なお、フランスでもドイツのそれに近い『土地』や『血』に根ざしたネイション観念が存在しており、世紀転換期に台頭してくる〔谷川/渡辺（2006）：158〕…と。最後に出てくる「『土地』や『血』に根ざしたネイション観念」とは、名前は出てこないが、モーリス・バレスであると思われる。

ところで野崎氏は、この問題に関して慎重に次のように述べている。「…『バレスのナショナリズム』といったとき、それはそのいずれの型のものなのかという疑問が当然出てくるだろう。あるいは二つの型を考えることにどのような意味があるのか、あるいはそもそも意味があるのかという問題も当然出てくるであろう…〔野崎（2008）：23〕と。

野崎氏は、バレスの「土地と死者」の理論をエスニック型とする判断に距離をとっている。これはなぜなのであろうか。この点については、野崎氏はこれ以上論及していない。本稿は、この問題について、初期著作『自我礼拝』と、バレス自身が新聞や雑誌、講演で発表した雑文をまとめた著作『ナショナリズムの諸相と教義』を中心に、バレスのロレーヌ親の変遷に焦点をしばり考察することとする。

## 2. モーリス・バレスについて

モーリス・バレスと聞いても、今日の江湖の読書子のなかで、その作品に目を通したことのある者はどれくらいいるであろうか。そう多くはあるまい。その意味では、バレスは「忘れられた作家」といってよい。バレスは、世代的にはエミール・ゾラやギー・ド・モーパッサンら19世紀自然主義文学と、アンドレ・ジッドやマルセル・ブルースト、ポール・ヴァレリー、ポール・クローデルら20世紀前半の文学の間に位置する。同世代の作家としては、アナトール・フランス、ポール・ブルジェ、ピエール・ロティがいる。

では、なぜ、バレスは忘れられてしまったのであろうか。伊吹武彦氏は、バレスの『自我礼拝』三部作の作品解説において、「バレスの古さ」という観点から論じているが、その状況は今日でも、大きく変化してはいないだろうと思われる〔伊吹（1970）：375-379〕。

しかし、バレスは生前、決して「知る人ぞ知るマイナー」な作家ではなかった。その死去に際しては「国葬」とされた<sup>2)</sup>。それだけに、その後の忘却が際立つ。しかし、バレスは忘却の淵に沈んだままの作家ではない。折に触れ、深い淵の底から浮かび上がってきたが、とりわけ注目されるのが、1980年代以降のことで、「バレス復権」とでもよぶべき、バレス再評価の動きが見られた。

たとえば、福田和也氏は、モーリス・バレスという作家を、第二次世界大戦期のいわゆるコロラトールの作家の系譜に位置付けながらも、それだけにとどまらず、いかに興味深い作家であるかを、さまざまな研究成果にきめ細やかに目配りしつつ論じている〔福田（1989）〕。従来のバレス研究からは、フランス・ファシズムの源流に位置付けて論じられることはほぼ基本的な認識であると思われる。〔深澤（1990）、（1998）、（1999）；野崎（1996）；中谷（1996）；STERNHELL（1978）、（1985）〕。

ここで、モーリス・バレスの生涯について簡単に触れておきたい<sup>3)</sup>。バレスは1862年、フランス東部ロレーヌのヴォージュ県のシャルム＝スュル＝モゼル（Charmes-sur Moselle）に生まれた。父親はオーヴェルニュ出身の金利生活者であり、地方の中産階級といってよい。バレス8歳の時、普仏戦争敗北により、故郷ロレーヌは分断され、アルザスとともにドイツ帝国領となり、賠償金支払い完了まで3年間、故郷シャルムもドイツに占領された。

ナンシーのリセを卒業後は地元の大学に入学するも、ほどなくパリに出てサロンに出入りし、自ら個人雑誌を発行しつつ有力雑誌へも寄稿し、文壇での地歩を固めた。1888年、最初の三部作『自我礼拝』の第一部『蛮族の眼の下』を発表し、翌年、ナンシーからブーランジェ派として国民議会議員に立候補し当選した。その後、ブーランジェ將軍の失脚とともに3回落選するが、1906年以降、その死まで国民議会議員の職にあった。

1894年に、「ドレフュス事件」が起こると、ドレフュスを擁護するゾラに対抗して反ドレフュスの立場をとった。1898年に父を、1901年には母を相次いで失った。この両親の死が、バレスに「祖先」の発見を促す契機のひとつとなったと思われる。

1906年、前述のごとく代議士に当選し、前後してアカデミー・フランセーズの会員にもなった。1914年には「愛国者同盟」会長となり、第一次世界大戦に参戦するフランス軍の士気を鼓舞するべく、文章を多数発表した。1918年、ドイツから奪還したアルザスを訪問し、1920年にはストラスブール大学で「ラインの神髓」と題する公開講義を行った。これはブーランジェ將軍への加担以来の念願であった、「アルザス・ロレーヌ」の奪還を実感するパフォーマンスであった。1923年死去し国葬に付された。

このように、そのプロフィールを瞥見すると、功成り名を遂げた人生を送ったように思われる。しかし、次章で見ると、その内面世界には大きなニヒリズムを抱えている姿が浮かび上がってくる[南(1987)]。

### 3. 「ロレーヌ」へのまなざしと「フランス」へのまなざし

バレスの初期三部作『自我礼拝』は、第一作『蛮族の眼の下』(1888)、第二作『自由人』(1889)、第三作『ベレニスの手』(1891)から成る。バレスの『自我礼拝』三部作の概要については、既に多くのバレスに関する研究の中において詳細な分析がなされている[野崎(1996);福田(1989, 2002):115-128]。この三部作は一種の「教養小説」として、19世紀末から20世紀初頭の青少年に広く読まれたものである[野崎(1996);南(1987):249;有田(1990)]。

第一作『蛮族の眼の下』において、「根」のない分裂した自我に苦しむ主人公が、第二作『自由人』において、本当の自分はどのようなものであるのか、俗世間との交渉を断って、ロレーヌの山奥の古い僧院にこもり、イグナチウス・デ・ロヨラの「靈操修行」の方法を援用して「自我」の探索を行う[門脇(1995)]。その結果次のような結論に至る。

「…僕たちの最後の黙想がはなはだ無味乾燥であったことは確実である。僕たちは、僕たち自身のすでに枯渇した部分を圧搾していたのである。(中略)書物が僕を感動させなくなるにつれて、毎日

は行って行くあの教会堂から、それを取り巻くあの墓から、営々として父祖伝来の仕事に骨折るあの緩慢な住民たちから、はなはだ漠然とはしているが、しかもえぐるようなさまじまの印象が立ちのぼった。僕は新しい深い感性を発見した。それはいかにも甘美だった。それは僕の存在もまたこの原野から発しているからである。(中略)僕はかつてロレーヌ州の土に仕えたことはないが、しかも僕の奥底に、昔の百姓たちから伝わった特異な性格をうかがうことが出来る。僕が持つ憂鬱の資産には、父祖がこの地平で感じた不安のいくぶんかが残っている。父祖がどうして彼らの国を打ち建てたかをたどって行けば、僕みずからの礎の置かれた順序が発見できるだろう。これは僕の意識の朦朧たる部分へくだって行くよい方法である [BARRES-伊吹 (1970) : 178-179] …」と。

主人公は、「他者」=「蛮族」によって傷つけられて苦しんでいる。自分はなぜ、苦しまなければならないのか。第一作『蛮族の眼の下』の「蛮族」とは、決して無教養で粗野な人間のことでない。バレスは自作を解説して次のように述べている。

「…(主人公が)『蛮族の眼の下』に生活することを嘆くのは、無教養な人たちや商売人に圧迫を感じるからではない。彼の悲しみは、人生に対して、彼のいなく夢とは反対の夢を持つ人々の間に生きるという点にある。たとえそれが洗練された教養人であっても、彼には異邦人であり敵である… [ibid. : 10]」と。

すなわち、「蛮族」とは自分の「感性」と合わない「他者」を意味する。バレスの敵意は、『無教養』で金儲けのことしか考えない俗人よりも、むしろバレス自身もそうであるような、知的教養にあふれた人にこそいだいた感情のように思われる。

では、どのような「教養」の持ち主を「蛮族」とみなしたのか。「蛮族」の典型として人物造形されているのが、第三作『ベレニスと園』に登場するシャルル・マルタンと言う人物であろう。

主人公フィリップ(第一作では「彼」、第二作では「僕」であった主人公は、第三作で初めて固有名詞を与えられる)は、第三作でブーランジェ派の候補者として国民議会議員選挙に南仏アルルから出馬する。シャルル・マルタンはフィリップのライヴァル候補として登場する。穏和共和派で職業は技師である<sup>4)</sup>。フィリップはシャルル・マルタンについて次のように述べる。「…その口調を聞いて、これは実証的精神を誇る手合いだなとすぐ感づいた。いな少なくとも学生気質を持っている… [ibid. : 303]」と。

穏和共和派が力を入れて取り組んだのが、教育の非宗教化であり、実証的、科学的な教育であった [谷川・渡辺 (2006) : 154-155]。そしてこの実証的精神によって学問を探究しようとしたのが、前述のルナンであった。バレスはルナンやテーヌらの文献学に拠った学問のあり方が、「真理」の認識にとどまり、行動不能性を導いているとして批判の対象にしたのである。この知的風潮はディレッタントイズムと呼ばれる。福田氏によれば、ディレッタントイズムは「…世紀末のフランスの知的な洗練をつくりだしていたのと同時に、現実の行動や、行動のなかに秘められた生の謳歌、直観と言った要素を強く抑圧した知的な閉塞を形づくっていた… [福田 (1989, 2002) : 117-122] ; HUGOT (1984)」。そしてこの知的閉塞状況を打破する契機となったのが、前述の「ロレーヌ体験」——「ロレーヌ州」の大地と、そこに眠る祖先の発見——であった。

しかし、「ロレーヌ」は「ロレーヌ」として自立できたわけではない。バレスは次のように述べて

いる。「…少なくともロレーヌの意識はフランス的意識のなかに包含され、消滅することによってフランス的意識を富ませた。フランス的性格の美しさは、重要ないくつかの部分において、わがロレーヌの父祖が創りあげた感性から成っている。この小民族は、墮落したのでもなく、眠ったのでもなく、無惨にも手足から生血をとられたために滅びたのである… [BARRES-伊吹. (1970) : 190]」と。

稲葉三千男氏は、これを「…フランス文化のなかでのロレーヌの異質性消滅の承認…」と捉えている [稲葉 (1994) : 402]。「自我」の根幹にはロレーヌの「大地と死者」がある — これがバレスの発見であった。しかし、そのロレーヌはフランスに吸収されてしまった。この認識から出てくるナショナリズムは、「ロレーヌ」に依拠した「エスニック・ナショナリズム」ではありえない。では、「市民的 (シヴィック)・ナショナリズム」なのであろうか。

第1章において、われわれはフランス・ナショナリズムの典型としてのルナン「日々の人民投票」について触れたが、バレスのナショナリズムは、「ロレーヌ」による「フランス」の選択という「日々の人民投票」と見ることができるであろうか。バレスは、「ロレーヌ」は「フランス」の一部として、フランスのなかへ消滅していると考えたのであり、そこには「ロレーヌ」の自覚的意志的な「フランス」選択はありえない。ここでは、バレスは「フランス」をいわばエスニックな単位ととらえて一体化を求めているのではないか。その意味では、この時点でのバレスのナショナリズムは、「フランス」を文化的一体の共同体ととらえることによる「エスニック・ナショナリズム」と呼べるかもしれない。

しかし1902年に発表された『ナショナリズムの諸相と教義』(以下、『諸相』)において披歴された「ロレーヌ」の見方は大きく変化している。バレスは次のように述べている。

「…皆さん、私はロレーヌ生まれです。私の小さい故郷がフランスに属するようになってから、まだ100年しかたっていません。…私たちがフランス国家に編入されたのは、私たちが好き好んだからではありません。こういうことになったのは、私たちがいるときはフランスから、あるときはドイツから、踏んだり蹴つたり目のにあわされたからです。…皆さんにはとてもご想像いただけないと思いますが、ロレーヌの歴史ほど惨めなものはありません。10世紀にはすでにロレーヌは、フランスとドイツのあいだの紛争の種でした。この両大国は、ロレーヌが自分だけでこじんまり生きることを認めません。ロレーヌには、歴史上誇りうる立派な殿様の家系もありましたし、風俗や制度もありました。したがって、せいぜい控えめに申しても、秩序や安定が確保されていいし、国家になってもよかったです。ところが不幸なことに、うちの殿様は、カペー王家にくらべて政治の駆け引きが下手でした。私たちをちゃんとは守ってくれず、やがて見捨ててしまいました… [BARRES-稲葉. : 110]」と。

さらにロレーヌがフランスの一部となってからについてもこう続ける。「…フランスに併合されて間もなく大革命の序曲がはじまり、私たちは熱狂して歓迎しました。1786年から89年にかけて、私たちの故郷の民衆は、事情がよくわからないまま、地方議会を招集して独自の政府を作ろうとしました。(中略)このような例で立証したかったことを一言で言うなら、私たちロレーヌ人はフランス人ではありません。なぜなら私たちがこの国家に加わったのは、フランスが「[カトリック]教会の長女」だからであって、フランス人が「人権宣言」を世界に提供したからではありません。私たちは、一つの精神とか一つの原理体系に属するようには、この祖国に属していません。にもかかわらず私たちは

フランスにやってきました。私たちには秩序と平和が必要だったからですし、それが他所では見つからなかったからです… [ibid. : 111-112]」と。

バレスは、ロレーヌには「歴史上誇りうる立派な殿様の家系」と「独自の風俗や制度」もあり、革命後も「地方議会を招集して独自の政府を作ろうとした」点などから独自のネーション形成の可能性もあったことを示唆している<sup>9)</sup>。そして「ロレーヌ」が「フランス」であることを選択した理由は、フランスが「教会の長女」であること、すなわちカトリック国であるという点にあり、それが「秩序と平和」を保障してくれるからだという。これは共通の宗教という点からするとエスニック・ナショナリズムとも受け取れるが、「秩序と平和」という点からすると、むしろ政治的な理由と取ることができよう。

すなわち、ロレーヌは文化的には独自のものだが、政治的な理由で「フランス」を選択した。要約するとそういうことになる。ここで重要なことは二つある。『諸相』においては、第一に、バレスはロレーヌの文化的独自性を強調しているという点であり、第二に、ロレーヌは自らの意志によって「フランス」を選択した（ここでは実態が問題ではなく、バレスがどう認識したかということ）という点である。

では、初期三部作『自我礼拝』の第二作『自由人』に出てくる、ロレーヌ体験からの洞察によって認識されていたことは、どのようなことだったであろうか。もう一度確認しておきたい。第一にロレーヌはフランスのなかに消滅し、フランスと一体であること、第二にロレーヌのフランスへの所属は、自ら望んだのではなく強制されたものである、という認識である。

『自由人』と『諸相』における認識の違いはどこから来るのであろうか。この問題に答えるには、さらなる資料の読み込みが必要になると思われる。そこで、最後に今後の見通しを述べておきたいと思う。

#### 4. まとめにかえて

まず、『自由人』を発表した1889年と、『諸相』を発表した1902年の、13年という時間の経過における、バレスの政治家としての立場が反映しているように思われる。すなわちアルザス・ロレーヌ問題である。

『自由人』発表当時、バレスは文壇にデビューした若手作家にすぎなかったが、その後、ブーランジェ派の国会議員となり、アルザス・ロレーヌの奪還を政治公約に掲げるナショナリストとして発言するようになる。

アルザス・ロレーヌの奪還のためには、ロレーヌがフランスに奪われ、滅ぶことで、フランスという大なるものの基盤となったという『自由人』のロレーヌ認識よりも、独自の個性を持ちつつ、自らの意志でフランスの一部を構成していた（いる）というロレーヌ認識のほうが、アルザス・ロレーヌのフランスへの奪還には都合がいいと考えたのではないか。

「ロレーヌ」は「フランス」とも「ドイツ」とも異なる独自性を持つがゆえに、ドイツとの一体化を阻止する正統性が存在する。「ドイツ」によって「ロレーヌ」の独自性が破壊されることは許され

ないからである。そこで、バレスはロレーヌという地域の独自性を強調し、「土地と死者」に依拠する理論を作り上げていった。表面的にみるとバレスのナショナリズムはエスニック・ナショナリズムと呼べるのかもしれない。しかしここで疑問が残る。それは、ロレーヌの「土地と死者」を強調することと「フランス」との一体性はどのように接合されるのか、という点である。この疑問があるために、バレスのナショナリズムを「エスニック・ナショナリズム」と評価するのは躊躇される。

一方で、ロレーヌは自らの意志で「フランス」に参加していたという考えは、ネーションへの参加の意思表示という点で、ある意味、ルナンの「日々の人民投票」に通じるものを持っている。バレスのナショナリズムには、ネーションへの参加意思を重視するルナンの「市民型（シヴィック）・ナショナリズム」の側面を指摘するのも可能となるのである。

このように考えると、今後、バレスのナショナリズムを「土地と死者」の教義からエスニック・ナショナリズムなのか、「市民型（シヴィック）・ナショナリズム」なのか、その両方なのか、更に考察を深めていきたい。

## 注

- (1) フランスの哲学者ジョエル・ロマンは、西欧型（シヴィック）ナショナリズムの考え方の典型としてエルネスト・ルナンを、東欧型／folk型（エスニック）ナショナリズムのそれとしてフィヒテをあげる従来の捉え方に対して、ルナンにもエスニックな要素が、フィヒテにも国民になろうとする意志を尊重するシヴィックな要素が存在することを指摘している〔ROMAN-大西（1997）〕。
- (2) フランスの作家で国葬とされたのは、現在のところ5人である。ビクトル・ユゴー、モーリス・バレス、ポール・ヴァレリー、シドニー＝ガブリエル・コレット、エメ・セゼールである。
- (3) 年譜については、伊吹氏訳の『自我礼拝』の巻末年譜〔伊吹（1970）：399-402〕をもとに、CHIRON（1986、1987）およびBROCHE（1987）を参照した。
- (4) 作中でシャルル・マルタンはフィリップを「急進派」、「反動派」と呼び、椅子を振りかざしながら「俺は穏健共和党（ママ）だ」と叫んでいる〔BARRES-伊吹（1970）：274〕。当時のフランスの政界布置は以下の通りである。普仏戦争敗北後の第三共和政フランスをかじ取りしたのは「穏健共和派」（オボルチュニスト）と呼ばれる人々である。左翼には「急進派」（ラディコー）が、右翼には「正統王朝派（レジティミスト）」、「オルレアン派」、「ボナパルト派」がいた。1886年、陸相に就任したジョルジュ・ブーランジェを中心に、以後、オボルチュニスト政権に反対する勢力が左右問わず糾合し、大きな政治的うねりとなった。これが「ブーランジスム」である。フィリップはブーランジェ派として、アルル選挙区に立候補したのであり、バレス本人も本文既述の通り、ブーランジェ派としてナンシーから下院議員に当選している。
- (5) フランスは大革命以前のアンシャン・レジーム期においては、多くの province や pays に分かれていた。それらの「地方」は言語や風俗において、相互に異なる状態にあった〔福留（2016）；末松（2005）〕。

## 参考文献

- 有田英也（1990）。「『成人』という課題：1920年代のモーリス・バレスの需要をめぐって」、『仏語仏文学研究』、第4号、東京大学仏語仏文学研究会、63-78頁。
- 稲永祐介（2015）。「ナショナリストの憎悪 - 第三共和制における二つのフランス」、『日仏政治研究』第9号、35-46頁。
- 末松 壽（2005）。「フランスの言語と文化：古典文学、1789年、フランス（語）の教育」、『広島大学フランス文学研究』、24号、広島大学フランス文学研究会、486-508頁。
- 谷川 稔／渡辺和行編（2006）。「近代フランスの歴史」、ミネルヴァ書房。
- 中谷 猛（1996）。「近代フランスの自由とナショナリズム」、法律文化社。



- 野崎次郎 (1996). 「バレスとナショナリズム — 観念小説三部作『自我礼拝』を読む —」, 『立命館言語文化研究』, 第 8 巻第 2 号, 立命館大学国際言語文化研究所, 23-40 頁. (電子版 <http://ha1.seikyuu.ne.jp/home/jiro/paper5.html> (2017 年 9 月 30 日最終閲覧))
- 原百年 (2011). 『ナショナリズム論 — 社会構成主義的再考』, 有信堂.
- 深澤民司 (1990). 「国民社会主義イデオロギーの誕生 — モーリス・バレスのナショナリズムについての考察 —」, 『専修法学論集』 第 52 号, 107-154 頁.
- 深澤民司 (1998). 「フランス・ファシズムの展開 — ステルネル論争を中心にして —」, 『専修法学論集』 第 72 号, 43-91 頁.
- 深澤民司 (1999). 『フランスにおけるファシズムの形成 — ブーランジスムからフェソーまで』, 岩波書店.
- 深澤民司 (2008). 「ネーションとナショナリズムの二つの理念型: ハンス・コーンの類型論を手がかりとして」, 『専修大学法学研究所紀要』 33 巻, 1-23 頁.
- 福田和也 (1989, 2002). 「モーリス・バレス フランス・ナショナリズム, または幕間の大活劇」, 『奇妙な廃墟 — フランスにおける反近代主義の系譜とコラボラトゥール』, 第 2 章, 国書刊行会 (1989), ちくま学芸文庫 (2002), 109-177 頁.
- 福留邦浩 (2016). 「フランスにおける『地域圏 (州) région』再編に関する歴史的考察 — province との比較を通して —」, 『日経大論集』 46(2), 215-224 頁.
- 南 充彦 (1987). 「モーリス・バレスの精神的彷徨」, 『愛媛法学会雑誌』, 第 13 巻, 第 2 号, 249-298 頁.
- BARRES, Maurice (1965-1969). *L'Œuvre de Maurice Barrès*, Club de l'Honnête Homme, Paris Tome 1. (伊吹武彦訳 (1970). 『自我礼拝』, 中央公論社.)
- BARRES, Maurice (1902). *Scènes et Doctorines du Nationalisme*, Librairie plon. (稲葉三千男訳 (1994), 『国家主義とドレフュス事件』, 創風社. 原著の第一部を稲葉氏が訳して原題とは別のタイトルをつけたものである。)
- BROCHE, François (1987). *Maurice Barrès*, J.C. Lattes.
- CHIRON, Yves (1986). *Maurice Barrès*, Perrin.
- CHIRON, Yves (1987). *Barrès et la terre*, Editions Sang de la terre.
- DE LOYOLA, Ignacio (1548). *Exercitia spiritualia*, (門脇佳吉訳 (1995). 『靈操』, 岩波文庫)
- HUGOT, Jean-François (1984). *Le Dilettantisme dans la littérature française d'Ernest Renan à Ernest Psichari*, Aux Amateurs de livres.
- RENAN, Ernest (1882). *Qu'est-ce qu'une nation ?* (鶴飼哲訳 (1997). 「国民とは何か」, 鶴飼他 (1997), 『国民とは何か』, 42-64 頁, インスクリプト.)
- RENAN, Ernest (1890). *L'avenir de la Science : Pensée de 1848*, Calman-Lévy.
- ROMAN, Joël (1992). Introduction et choix des textes de Renan, *Qu'est-ce qu'une Nation ?*, Presses Pocket (大西雅一郎訳 (1997). 「二つの国民概念」, 鶴飼他 (1997), 『国民とは何か』, 8-40 頁, インスクリプト.)
- SHULMAN, Stephen (2002). “Challenging the civic/ethnic and west/east dichotomies in the study of nationalism”, *Comparative political studies*, 35(5), Sage Publications. pp.554-585.
- SMITH, Anthony D (1986). *The Ethnic origins of Nations*, Blackwell Publishers. (巢山靖司他訳 (1999). 『ネーションとエスニシティ 歴史社会学的考察』, 名古屋大学出版会.)
- SMITH, Anthony D (2010). *Nationalism : theory, ideology, history*, 2<sup>nd</sup> ed. Cambridge.
- STERNHELL, Zeeb (1978). *La droite révolutionnaire*, Editions du Seuil.
- STERNHELL, Zeeb (1985). *Maurice Barrès et le nationalisme français*, Editions Complex.
- TRONQUART, Georges (1980). *La Lorraine de Barrès Mythes ou Réalité ?*, Publications université Nancy II.